千刈狸の呟き

～ 面白がらなくちゃ！ ～

月影の狸

二学期の終わり頃に、他の小学校では、早々と中止になっていた修学旅行が近所の小学校で行われた。男鹿半島へのバス旅行で、十分に感染症対策をし（例えばバスの中では出来るだけ話さない等）、最新の流行状況を確認してから行うというもので、父兄や住民達の中には「そこまでしてもやらなければならないのか」「旅行先でクラスターがおきたらどうするのか」などと心配する声もあったが、雪模様の中、旅行は決行された。

次の日、旅行先の男鹿半島から無事に学校に到着後、早速鼻をグズグズさせて来た子供もいたし、その次の日に風邪気味の子供達が顔を見せてくれた。「どうだった？」と尋ねると、「冬の男鹿半島、最高！」「吹雪の寒風山楽しい！」「記念撮影の時にね、奇跡的に晴れたんだよ！」とニコニコと話してくれた。秋晴れの中、バスガイドさんのお話やクイズ等で盛り上がったり、談笑しながら食べるご馳走、深夜まで続く枕投げ‥そんな普通の旅行とはかけ離れていた今回の旅行が、もう子供達の中でキラキラ輝く思い出になっている事を実感した。それと同時に「何でも面白いものにしてしまう能力」や「感性の瑞々しさ」に感動しながら、それは今、大人の私達に最も不足しているものではないかとも思った。

見方を変えれば、暗くて先が見えず、辛くて、良い事が一つもないようにさえ思える世の中で、子供達や世の中を明るく照らしてくれる存在に私達は知らず知らず救われているのではないのかと気づけた出来事だった。もちろん、学校当局の英断に、子供達への深い愛情を感じながら。

ストレスに強い人の、ものの捉え方の特徴の一つに、辛い事や困難な事、脅威に思う事などに対して、ただ恐れ怯えるのではなく、「自分に変えられないものは、取り敢えず面白がってみる事」というのがある。それを興味の対象にしたり、何かこの局面で工夫できないのか考えてみたり、今こそ自分の出番だ、一丁やるか！と奮起したりすると、ものの捉え方が全く変わる事で乗り越えられるのだと言う。修学旅行の場面を考えてみると、私達大人は、体験したこともないのに、辛そうだとか危なそうだと決めつけてしまい回避する事を第一選択にするのとは違い、子供達は、どうせなら楽しもうよ、何かいいことが見つかるかもね、初めての修学旅行だもの、何でもいいからやってみたーい！と挑んでいけるのだ。

また、不便さ、不都合さ、困難さにあえてむかっていく事の一つに、キャンプがある。キャンプ用品の市場規模は30年前のキャンプブームを超え、多様化しながら伸び続けている。家を出て、電気やガスや水道の恩恵を受けずに、何故出かけて行くのかという事については、様々だろうが、今まで述べてきた事と同様に、不便さの中に工夫をしていく楽しさ、不都合さに挑戦していく面白さ、達成感など、それぞれが享受するのだろう。

コロナ禍にあって、特にソロキャンプは、自然の中で人混みから離れマスクを外して解放され、自分のペースだけで時間を刻んでいく事が出来るのでブームにもなっている。

有名なソロキャンパーが言っていた。

「‥キャンプの中心は焚き火だ。木の枝を集めて火をおこし、育てた炎に癒される。道具もスタイルも自己流でやるとキャンプは楽しい。失敗も醍醐味のうち。」

スイッチ一つで手に入る火ではなく、さらにその火を「育てる」と表現するあたりに、キャンプへの思い入れの強さを感じさせられる。そして、失敗もまた醍醐味、味わい深いものと捉える心境に芯の強さやタフさを感じられるし、キャンプに行こうとする原動力のようなもの、つまり面白がっている様子が窺える気がする。

SNSなどが、溢れるほどの情報をもたらし、様々なブームなどを牽引する中で、「何でも面白がれる」チャンスは沢山ある。今、私達の最大の困難は、停電でも大雪でもなく、「新型コロナ」そのものなのだから。

以前、様々な困難にあっても、素敵に生きていた樹木希林さんがインタビューでこう言っていた。

「面白がらなくちゃ、やっていけないわ。この世の中。」なのである。

【発行所】一般社団法人 由利本荘医師会（毎月１回発行）　【医師会HP】http://honyui.jp/
由利本荘市水林456-4 TEL0184㉒4085